

湿潤療法 徐々に広がる

すり傷や切り傷など皮膚の傷は、乾かしてかさぶたをつくるよりも、潤いを保つ特殊なシートで覆った方が早くきれいに治る。こうした考えに基づき新しい治療法の湿潤療法（モイストヒーリング）が少しずつ広がっている。消毒も塗り薬もガーゼもいらない、これまでの常識を覆すような治療法だ。

（岩本進）

かさぶたなし 治り早く



宮崎恭介さん

腕のすり傷に張った潤いを保つ透明なシート（中央）みやざき外科・ヘルニアクリニック提供



乳幼児、感染性ある患部は不適

「二年前に医学書で知り、治療で使っています。傷を水で洗ってシート張るだけなので患者も驚きますが、早くきれいに治るので評判も良い」と、みやざき外科・ヘルニアクリニック（札幌市中央区）の院長、宮崎恭介さん（左）は話す。傷口を洗い消毒し、薬を塗ってガーゼを当て、毎日換えるというのが従来の傷の治療法。湿潤療法は傷口を水道水できれいに洗うのは同じだが、あとは透明か半透明の特殊なシート（創傷被覆材）で傷をぴったり覆うだけ。数日おきに張り換えればよい。

「傷から出る体液（滲出液）で傷が乾かない状態を保つことが、表皮の再生に最適なのです」と宮崎さん。従来だと、ガーゼ交換のたびに再生中の表皮がはがれ、治りをかえって遅くしていたという。

自転車で転倒、腕と脚にびに割れて、出血を繰り返す。宮崎さん「ワーパード」。救急はんそり傷を負った男性は、同じように「ワーパード」と宮崎さん。これまでに約五百例をクリニクで計十カ所にて治療した。すり傷や切り傷のシートを張る治療を受け、四日後、傷口が一面ピンク色に変わり、表皮が生まれ始めた。替えのシートも徐々に小さくなった。さるとはほとんど目立たなくなった。

③きれいに治るーを挙げ

「従来のような早くは治らなかった。特にひざやひじはかさぶたが動いた。材料の大きさが異なるさまさま」

「従来の治療法に比べ、傷の治る期間はおよそ半分。早く治れば傷口で余計な反応が起きず、あとも残りにくい。シートで数日間覆い、家庭に広め、大学医学部でも正しい湿潤療法の知識を教えることが、大切だと思います。」

最後に家庭での正しい傷のケアを紹介しましょう。

①傷口を水で洗いますー

②傷口をガーゼなどで押さえて止血します。

③傷口が乾かないように特殊シートで保護します。迷うときには医療機関を受診しましょう。

北里大・塩谷名誉教授に聞く



自然治癒力生かし 褥瘡ケアでも活躍

湿潤療法に詳しい北里大名譽教授の塩谷信幸さん（左）は形成外科医に、その特徴や現状を聞いた。

湿潤療法は、人間の自然治癒力をうまく使います。傷口から出る滲出液は、さまざまな物質を含んだ「傷を治すカクテル」を治すカクテル。これを乾かしてはもったいない。乾かしてかさぶたをつ

湿潤療法について語る塩谷信幸さん

「（再）診料などがかる。保険適用外のシートもある。湿潤療法が受けられる医療機関はまだ多くありません。一方、家庭向けに潤いを保つ特殊シートが市販されている。ジョンソン・エンド・ジョンソンの「キズパド」が未成熟な二歳以下の乳幼児に使用できない。傷口の周囲が赤かったり、うみを吐いたり、感染の可能性がある場合は使ってはいけません。」

四十年以上も前に英国の動物学者が実証した治療法ですが、日本の医療機関ではまだまだ普及していません。医師らが従来の治療法に執着していること、効果的なシートの開発が近年のことなどが要因ではないで